

追悼 松田行雄先生

松田行雄先生、さようなら

横内 文人

私が長野市から波田小学校へ転任した年に、松田先生は横浜国立大学の宮脇昭先生の研究室へ内地留学に行かれました。翌年4月に波田小学校へ戻られました。

波田村役場の関係者から「波田村でもやがては村誌を作るから、二人で植物調査を始めて」と、言われました。

時を同じくして宮脇先生の指導のもと「長野県植生図作成調査団」が結成されました。松田先生は、その中心的な活躍でした。4年間で5万分の1の長野県全域の植生図を完成させました。その成果は「長野県の植生図①(1973)」「長野県の植生図②(1974)」「長野県の植生図③(1975)」「長野県の植生図④(1976)」「長野県の植生自然度図(1976)」「長野県の潜在自然植生図①(1977)」「長野県の潜在自然植生図②(1978)」「長野県の現存植生(1979)」として刊行されました。「長野県の現存植生(1979)」の取りまとめは、松田先生・八幡先生・私の3人が編集委員として委嘱されました。松田先生のお宅へ時々集まって編集作業をしました。調査員へ原稿・写真等の依頼、県庁の関係者への取り次ぎ、宮脇先生とのやりとり等に全てを松田先生が担当されました。松田先生のお陰で無事に発刊になりました。

波田村の植物調査で栗谷俣沢上流を探索したときの事です。2人とも初めて見る草本に出会いました。写真に収め、二人で1本ずつ乾燥標本するために採集しました。松田先生は帰宅すると、すぐに奥原弘人先生のお宅に出掛けました。不明な植物は「ケヤマウツボ」と同定されました。松田先生から私宅に電話で奥原先生の同定結果の報告がありました。

「おれ達は、まだ勉強が足りないな」

と、おっしゃいました。ケヤマウツボは、長野県内では6ヶ所の報告があるのみです。「長野県版レッドリスト植物編(2014)」では、絶滅危惧ⅠB類(EN)に指定されています。

波田町誌自然民族編(1983)の自然の部は、私の主張が通って当時としては珍しい横書きでの発刊となりました。

1979年には、小谷村の柵池高原のゴンドラ架設の環境調査に関わりしました。松田先生・八幡先生・

私の3人で1年間で調査・報告をしました。楽しかったのは、いつも宿泊先が異なることでした。予約の電話は、いつも松田先生がやっておりました。旅館や民宿によつての料理が楽しめました。

波田小学校での職員研修旅行では、2人で四国の白髪山でヒノキ群落、伊豆の天城山ではブナ群落等の調査をしました。

令和5年2月24日、松田先生のご葬儀に出掛けました。私は奥様から弔辞を依頼されました。祭壇には、松田先生の温厚なお顔の写真がありました。中に寿小学校の献花がありました。寿小学校は、松田先生が学校長を勤め、定年退職した学校です。私は今まで何人もの学校長のご葬儀に参列しましたが、旧の学校の献花は全く記憶にありません。旧の学校の職員からの献花は、松田先生の「人となり」を物語るものです。学校長としての指導力もさることながら、いかに同僚に慕われていたかと言うことです。

弔 辞

先の二十日、天寿を全とうされた松田行雄先生の旅立ちに長野県の植物関係の諸団体を代表して、お別れの言葉を申し上げます。

松田先生は、教員生活の傍ら長野県植物研究会、長野県植物誌編纂委員会、長野県植物誌CD-ROM作成委員会、長野県植生図作成調査団、長野県レッドデータブック作成委員会、波田町・松本市・生坂村・大町市・美麻村・麻績村・檜川村等の市町村誌、信濃教育会夏季植物講座等々の植物関係の調査、執筆、講師等に関係せられました。そしていつも中心的な役割を担っておられました。

長野県植生図作成調査団では先頭に立って、長野県の植生図作成に歩かれました。「長野県の現存植生」等の7冊の出版など、昭和53年の長野県知事表彰も、松田先生の活躍があつてのこととおっております。

長野県植物誌作成委員会では、約20年に及ぶ事務局を担当され、平成11年の信毎賞の受賞へと繋がりました。

私が、波田小学校へ転任した昭和45年に松田先生は、横浜国立大学の宮脇昭先生の研究室へ内地留

学に行っておりました。我々の植生図作製の仲間では、1番先に内地留学されました。以後に何人もの植物関係の内地留学生が育ったのも、松田先生の研究の姿を見たからです。松田先生は、ミズゴケの研究家として知られております。全国各地の湿原を回り、植生調査・報告、レッドデータブックの作成等々に関わられました。宮脇先生の監修された「日本植生誌」の中部編のミズゴケの研究報告は、横浜国立大学の教授・助教授・研究生の先生方に交じっての一メンバーだったのです。

昭和50年に長野県の植生図作製が一段落すると、「横ちゃ、北海道へ行けや」と話が持ち上がりました。「横ちゃの行きたい所1カ所、俺の行きたいところへ1カ所、10日ばかり、北海道でうんまいもの食べて来るじゃなか」ということでした。夏休みに直江津から夜行で青森へ、フェリーで函館へ、稚内から礼文島へ、サロベツ湿原を回り、大雪山へと登りました。最近、私はある高山植物の本を読みました。「富士山に登って山岳の高さを語れ、大雪山に登って山の大（おお）さを語れ」とありました。大雪山の雄大さは、言葉では言い尽くせない規模でした。3～4kmも長く続く一面のエゾノハクサンイチゲ、エゾコザクラ、エゾノツガザクラ、ホソバウルップソウ等の大群落には、「大感激」の一言でした。帰りの札幌ビール園では、ジンギスカンと生ビールの打ち上げでした。松田先生は、大きなジョッキを二つ楽しみ、ご満悦でした。青森から夜行列車「ゆうづる」の途中、大きな地震がありました。4日間も大雪山を歩き回って疲れはてて、すっかり寝込み、3時間半も電車が停まったことは、全く知らなかったのです。新宿駅では松本行きの予約の特急列車が出てしまいました。今はただ懐かしい思い出です。

「横ちゃ、内地留学に行つて来い」と、何度も言われました。「植物の実力のない、俺なんか」と言うのと、「実力がないから、行くのだ」と、言われました。あるとき、「内地留学は、ありゃー、命の洗濯だ。現場のことは一切離れて、全く好きな時間だ。俺、もう一回、内地留学に行け、と言われると喜んで行く」。この「命の洗濯」の言葉に意を決し、信州大学の清水先生にお願いして、私は昭和55年に国立科学博物館新宿分館（指導教官：金井弘夫先生）での1年間の研修の日々を楽しみました。

内地留学中の4月のある夜にアパートへ松田先生

から、電話がかかって来ました。

「横ちゃ。俺、職員旅行で八丈島へ行くで、一日遅れて来て一緒に歩けや」。

喜び勇んで飛行機に乗って出掛けました。初めて見る南の八丈島の植物は、全く種類が分かりませんでした。二人でノートを出したものの名前が分からない、見たこともない植物ばかりでした。記録は諦めて、専ら採集に専念しました。木本のシダ植物のヘゴを初めて見ました。帰りの飛行機が悪天候で飛ばなくなり、船の旅となりました。12時間の船旅は、全く暇なものでした。夕食を一緒にとり、松田先生は、「俺、明日は授業あるは、」と言って、夜行の急行アルプスで松本へ帰られました。

一緒に調査した日々を思い出すと、際限がありません。これからは、先に旅立った清水建美先生とともに天国のハスの花咲く湿原で、植物分類やミズゴケ調査を始めることでしょうか。時には、一休みして少々ビールを飲み、回りの景色でも眺めてください。ゆっくりと歩かれることが最善かと思います。

長野県の植物研究に一生を捧げた松田行雄先生との思い出の一部を語り、50年もの長きのご指導に御礼申し上げて、お別れの言葉といたします。ありがとうございました。さようなら。

令和五年二月二十四日

長野県植物研究会 横内 文人

松田行雄先生を偲ぶ

土田勝義

昨年2023年2月20日に松田行雄先生が逝去された（享年89歳）。松田先生は高齢になられて肺を患い、一日中酸素ボンベを身につけて生活されていました。それでも野外活動は出来ないが、執筆や標本整理など日常生活は元気にされておられたようです。でもいつかはという危惧があるなかで、当日早朝、突然静かに息をひきとられたそうです。

私が松田先生と知り合ったのは、長野県植物研究会が発足して数年後に、私が当時信州大学教養部の生物教室に勤めて研究会の事務に携わった折の研究会の例会でした。二人とも松本市在住だったこともあり親しくさせて頂きました。その頃松田先生は40歳前だと思いますが、精力的に湿原の植物や植

生の調査、研究をされておられ、当時からミズゴケ分類の権威でもありました。植物に関する知識や情熱も半端でなく、教職に就かれながらどうしてこんなに知識が豊富なのか恐れを感じたものでした。ときにお宅にお邪魔をすると、新聞紙に挟んだ植物標本が山のように部屋のあちこちや押し入れに積まれており、ミニハーバリウムの観がありました。松田先生のご業績は本誌に別掲されるそうでここでは具体的に触れませんが、主なるものは湿原の植物、植生とくにミズゴケ類の分類は専門家と同等ではないかと思います。これを武器に、長野県のみならず、全国の湿原調査や植物採集を行い、諸外国の湿原にも足を伸ばしておられます。その飽くなき研究への意欲、エネルギーは、私のような若輩にはとてもついていけない距離を感じました。逆に二足のわらじを履きながらこんなに頑張っている人がいるのだから、自分も頑張らなければと自らを律したものです。また先生はそういう立場からいわゆる専門研究者を厳しい目で見えており、時々鋭い批判をされておりました。亡くなられてから奥様に伺うと、まだお若い頃、教員として共稼ぎだったそうですが、自分は教員を辞めて植物の研究者になりたいがどうかと相談されたそうです。結局は奥様が教員を辞められて、松田先生の研究生活を支えられたということです。私は松田先生がなぜそのように植物に対して強い思いや、情熱をもっておられるか若い時のこと、ルーツは付き合いが遅かったのでよく知りません。また私も含めて周りから湿原の研究で学位をとられるよう勧められ、またその機会もあり論文をまとめましたが最終的には提出を取りやめてしまいました。また各種顕彰についても断ってきたそうで、色々な権威ものには反骨的なものがあったようです。

そんな関係で私も植物研究に携わる中で、私が大学の研究者という立場上、各所から様々な調査依頼があり、松田先生に協力をお願いするようになりました。特に各地の植物相調査、湿原調査関連は松田先生にお任せしました。松田先生はお勤めしながら、休日を返上して調査、研究に充てて頂き感謝に堪えません。大きな調査としては、白馬村の全湿原調査、霧ヶ峰山麓の湿原調査、霧ヶ峰3湿原調査、美ヶ原植物相調査、旧檜川村植物誌調査など多数あります。また編著、共著で、「長野県の植生」、「美ヶ

原・霧ヶ峰の植物」などを出版することが出来ました。先生独自の研究では特に霧ヶ峰八島ヶ原湿原には格別な思いがあり、昔から10年おきに継続されてこられた定置枠（ベルトトランセクト）の調査を数日間掛けて湿原のど真ん中で、一日中座することもなく立ちっぱなしで調査をされていた姿を見て（座ると湿原をより傷めるため）、その情熱と湿原を愛する心、体力には驚かされました。そして八島ヶ原湿原の植生が乾燥化に向かっていている行方に危機感を持たれ、内外に訴えられました。松田先生の霧ヶ峰の湿原の研究成果は、八島ヶ原湿原の世界レベルでの重要性とその保全の必要性を訴えるために、湿原のそばにある八島ビジターセンターに展示されています。

清水建美先生を先頭に松田先生世代の長野県植物研究会発足時の植物研究者は多数おられますが、その世代の方々の長野県（とは限りませんが）の植物研究の発展と成果はその質量とも最大と思われ、それによって一世代下以降の我々は様々かつ多大な恩恵を得ております（もちろん、すでに長野県には傑出した植物研究者が幾人もおられますが）。この方々の成果、業績、ご協力がなかったらその後の優れた後輩の輩出、研究成果、また「長野県植物誌」は完成しなかったでしょうし、長野県植物研究会も継続しなかったでしょう。今もっと若い世代の方々がそれを引き継ぎ、また発展されておられるのは、このような情熱的、精力的な先輩の方々の研究成果と活躍の賜物と思います。最近次々に松田先生の世代の方々の訃報を聞くと心が痛みます。そしてこのような故人の方々のおかげで、自分も含めてまた長野県の植物研究‘界’もあるのだということを肝に銘じたいと思います。

そういう意味も含めて松田先生に感謝を申し上げます。また若い方々の奮起をお願いしたいと思っております。私には偉大な先駆者をなくしてしまったという寂しい思いと、多くの植物に対する知識を教えて頂き、また自然研究への情熱を肌で感じさせて頂き感謝の念に堪えません。松田先生もまさに植物の精の人だったと思います。心からご冥福をお祈りいたします。

松本市 信州大学名誉教授 土田勝義

